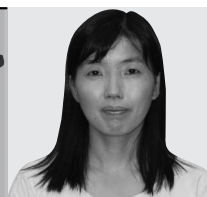
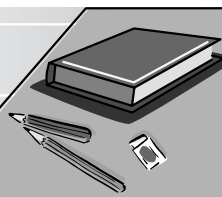


# 学生時代と図書館 69

— 先人たちの偉業に出会う —

畑田 彩



私には忘れられない授業がある。大学3年生のときに受けた生態学の授業だ。この授業は3人の教官が持ちまわりで4回ずつ授業をすることになっていた。そのトップバッターが故安部琢哉先生であった。安部先生の講義のテーマは「なぜ地球は緑なのか、なぜ植物は草食動物に食べつくされてしまわないのか」。なぜなら植物は非常に分解しにくいセルロースという物質から成る細胞壁をもっていて、動物はこの細胞壁を消化するのが大変だからたくさんは食べられないのだ。文章にすればたった4行の理由について、安部先生は4回分の授業すべてを使って延々と話し続けた。毎回「なぜ、地球は緑なのか。」で始まり、前回とほぼ変わらない話をするので、「この先生はアルツハイマー病なんじゃないか?」と私は本気で心配した。きっとあの時の安部先生にとって、「なぜ地球は緑なのか」は最大の関心事だったのだろう。安部先生の授業から、私は地球が緑である理由だけでなく、研究者とはどういう人種なのかを学んだように思う。

安部先生はこのテーマについて持論を展開した論文(Abe T & Higashi M. 1991. *Cellulose centered perspective on terrestrial community structure*. *Oikos* 60:127-133)を資料として配った。これが私と学術論文との初めての出会いだった。受動態で書かれた文章。明確な論理。行間に見え隠れする安部先生の自信。「なぜ地球が緑なのかを検証することはできないが、これで間違いないだろう。」と言っているような気がした。大学院に進んだらこんな論文をたくさん読み、いずれは自分も書くのだ。期待と不安が入り混じった気分になったのをよく覚えている。

大学院に進んでからは、自分の研究と関連のある論文を検索しては、その論文のある図書館を訪れた。私が所属していた大学は各学部に図書館が

あって、大きな書庫があった。中でも農学部の本庫は広く、膨大な研究雑誌が所蔵されていた。暗くて埃っぽい書庫。先人たちの偉業がたくさん詰まっている場所だった。その中から目的の論文を探し出しては読んだ。英語を読むのは苦痛なはずなのに、興味のある分野の論文はノートにまとめながら夢中で読んだ。先人たちが残した論文から、私は生態学の方法論を学び、自分のしている研究の新しいところはどこなのかを知ることができた。図書館は研究者の卵であった私に、新しい知識と研究者の目を与えてくれた。

大学院では論文紹介のゼミがあった。博士課程1年の時、私は70ページという長文の論文を読み、内容を紹介した。南米で見られるアリと植物の共生関係がどのように進化したかについてのレビュー(Davidson D. W. & McKey D. 1993. *The Evolutionary Ecology of Symbiotic Ant-Plant Relationships*. *Journal of Hymenopteran Research* 2:13-83)だった。私はマレーシアの熱帯雨林を調査地としてアリ-植物共生系の研究をしていたのだが、南米の研究のほうがずっと進んでいることを痛感した。そのころは専門用語まで網羅された電子辞書はまだなく、わからない単語があるといちいち辞書を引かなければならなかった。発表のための資料を作るのにもかなりの時間を費やした。ゼミ発表を終えたときの達成感を私は今でも覚えている。そして、いつか東南アジアのアリ-植物共生系についてこんなレビューを書きたいと思った。

博士課程2年の終わりに、私の初めての論文が受理され、研究雑誌に載った。参考文献リストの最初に挙げたのは、最初に読んだ安部先生の論文だった。運命ではなく、アルファベット順のせいである。

はただ あや(講師・生態学)